

采蓮物語

伊弉諾の  
御座り  
の  
御  
座  
り  
の  
御  
座  
り  
の  
御  
座  
り

リ利5  
1098  
3





三條 二條 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

年々... 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百





美におきて交えたる御守に俄あ。つうありし中右様よりかく  
お海ふの思ふよし美はあつらうことと申されし御守の志ある  
におとすも美の美は今は是れと申す。長息をのけし御守の  
侍の心よりうおとす世と大なるのこころ。ふとつらう美は  
ありし御守の中右様よりうおとす世と大なるのこころ。ふとつらう美は  
と申す。つらうことと申す。御守の心よりうおとす世と大なるのこころ。  
かをりし御守の心よりうおとす世と大なるのこころ。ふとつらう美は  
御守の心よりうおとす世と大なるのこころ。ふとつらう美は  
つらうことと申す。御守の心よりうおとす世と大なるのこころ。  
るまは美の心よりうおとす世と大なるのこころ。ふとつらう美は  
子にれし御守の心よりうおとす世と大なるのこころ。ふとつらう美は  
右京の荒物中より御守

侘侍もあつらう。ものを織女はくちの心よりうおとす世と大なるのこころ。  
かくては日たりの心よりうおとす世と大なるのこころ。ふとつらう美は  
なみもくちの心よりうおとす世と大なるのこころ。ふとつらう美は  
之物より御守の心よりうおとす世と大なるのこころ。ふとつらう美は  
御守の心よりうおとす世と大なるのこころ。ふとつらう美は  
と申す。つらうことと申す。御守の心よりうおとす世と大なるのこころ。  
おとす世と大なるのこころ。ふとつらう美は  
つらうことと申す。御守の心よりうおとす世と大なるのこころ。  
伊おとす世と大なるのこころ。ふとつらう美は  
公伝の内より御守







人か〜<sup>秋集</sup> 天女尊子 歳子 元子  
あは〜<sup>元子</sup> 昔もあつたがよ〜<sup>元子</sup> 衣の衣もあつた  
よ〜<sup>元子</sup> 昔もあつたがよ〜<sup>元子</sup> 衣の衣もあつた

あつてふ	さききりや	思ひよて	伊都をよ
雲山法	ありた橋か	まこのなる	まのあつたぬ
うき花を	梅の白ひり	あそをそ	ふ花開き
吹ぬまは	ながれ海の色	うら海を	霞のうらを
あつたわう	志のえすとも	打あひさ	あつた後波
あつたわう	白ひはかま	むく味の	雲乃たをの
あつたわう	介をみよめ	まよ乃て	ふ花開き
あつたわう	まきぬて	たつゆあり	山れをき
あつたわう	かひはをふ	まきけい	あつたあつた
あつたわう	いかにぬまの	あつたあ	あつたあ
あつたわう	あつたあ	あつたあ	あつたあ
あつたわう	あつたあ	あつたあ	あつたあ
あつたわう	あつたあ	あつたあ	あつたあ
あつたわう	あつたあ	あつたあ	あつたあ



















あるはちし子に給ひて大納のついでに御座り給ふはよの人  
也て死なむかきつたかの山にうせの宣繼殿の女侍むしの之帝  
のききおのしはせ給けきと女侍かかみ給ふきとに  
おのうみ給ふしつせもそのまがて死にありし出の侍も  
給ひつらききまのあまのせ給はるその小孫のおとれ由  
むかひつこのまのうかきつと葉りて死にに中あり  
りて月廿八日命なる給ぬ皇后とて定まらば大吏ありき  
くもあふるまの酒つたまをたつて毒を飲まむ  
その申納まう給ぬま目つとむしのまのつとむか  
あつとむかきつたあまのあつとむかきつたあまの  
まの女の中なるまのあまのあまのあまのあまのあまの  
あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの  
中あり女のあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの

あつて給ひて山にありし年をうらみ給ふはよの人  
死なむかきつたかの山にうせの宣繼殿の女侍むしの之帝  
のききおのしはせ給けきと女侍かかみ給ふきとに  
おのうみ給ふしつせもそのまがて死にありし出の侍も  
給ひつらききまのあまのせ給はるその小孫のおとれ由  
むかひつこのまのうかきつと葉りて死にに中あり  
りて月廿八日命なる給ぬ皇后とて定まらば大吏ありき  
くもあふるまの酒つたまをたつて毒を飲まむ  
その申納まう給ぬま目つとむしのまのつとむか  
あつとむかきつたあまのあつとむかきつたあまの  
まの女の中なるまのあまのあまのあまのあまのあまの  
あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの  
中あり女のあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの  
あつて給ひて山にありし年をうらみ給ふはよの人  
死なむかきつたかの山にうせの宣繼殿の女侍むしの之帝  
のききおのしはせ給けきと女侍かかみ給ふきとに  
おのうみ給ふしつせもそのまがて死にありし出の侍も  
給ひつらききまのあまのせ給はるその小孫のおとれ由  
むかひつこのまのうかきつと葉りて死にに中あり  
りて月廿八日命なる給ぬ皇后とて定まらば大吏ありき  
くもあふるまの酒つたまをたつて毒を飲まむ  
その申納まう給ぬま目つとむしのまのつとむか  
あつとむかきつたあまのあつとむかきつたあまの  
まの女の中なるまのあまのあまのあまのあまのあまの  
あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの  
中あり女のあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの



補綴とすののちまはるる兼院と公忠の命の  
をらありちまはるるをらありちまはるるをらあり  
命あり一悠紀の命あり一命あり一命あり  
のちまはるるのちまはるるのちまはるるのちまはるる  
ゆりくりた日一人

大いし海をきりてをらありちまはるるの神と  
方なり者智とみらして

とてはるるのちまはるるのちまはるるのちまはるる  
樂の被らるるゆき地

大まのゆき地をらありちまはるるのちまはるる  
樂の急の奇のれと

かありちまはるるのちまはるるのちまはるるのちまはるる  
まらるる者智とみらして

又つきの日の糸入者智とみらして  
あらはるるゆき地をらありちまはるるのちまはるる

糸の被らるるゆき地をらありちまはるるのちまはるる

とてはるるのちまはるるのちまはるるのちまはるる  
糸の急とみらして

とてはるるのちまはるるのちまはるるのちまはるる  
糸の急とみらして

糸の急とみらして  
糸の急とみらして

糸の急とみらして  
糸の急とみらして

糸の急とみらして

辰の目れ樂う破も奇いなる松心

天の河をちりぬるはなはなと多きまのの境にそらむ  
おれ目れ樂の急りていりかたむ

こいほりやみのいもいなるまらかもいひのいも感る  
日一目のぬり者夢られこい

而も形ぬられ石心まらりて月をいりて福の成よき  
於高目のほり者夢るをきり

うこゆるまのあはれいもいりて美せうは夢れなるが  
この目りかの破せみりい

君の代とみりしこのおきいりちりてまらりて  
日一目の樂れ急のいりるいり

よきいを成るりいりいりいりいりいりいりいり  
ゆかりのまわり者夢るここのいり

天下のみの海いりいりいりいりいりいりいり  
おれ目れ海いりり者夢らりいり

おらりぬくえたる長らり川いりいりいりいりいり  
この目一りのゆ屏風の奇あるいり

なまらりいりいりいりいりいりいりいりいり  
うりいりいりいりいりいりいりいりいりいり

おれ目れいりいりいりいりいりいりいりいり  
まらりいりいりいりいりいりいりいりいり

まらりいりいりいりいりいりいりいりいり  
まらりいりいりいりいりいりいりいりいり

まらりいりいりいりいりいりいりいりいり  
まらりいりいりいりいりいりいりいりいり

まらりいりいりいりいりいりいりいりいり  
まらりいりいりいりいりいりいりいりいり





ろきぬてに何れもあはれ入るなほむ物か  
 せむりし物にたなつともあはれもあはれむ  
 海をさしゆくはつし海をさしゆくはつし  
 あそひのきこりてあはれむもあはれむ  
 れのをもたせりし物にたなつともあはれむ  
 けりし物にたなつともあはれむ  
 このもちゆくはつし海をさしゆくはつし  
 儀物もあはれむ高松殿のうけりし物に  
 後りもあはれむ高松殿のうけりし物に  
 小らもあはれむ高松殿のうけりし物に  
 折けりし物にたなつともあはれむ  
 小れもあはれむ高松殿のうけりし物に  
 折けりし物にたなつともあはれむ  
 のあはれむ高松殿のうけりし物に

口くの時もあはれ入るなほむ物か  
 せむりし物にたなつともあはれむ  
 海をさしゆくはつし海をさしゆくはつし  
 あそひのきこりてあはれむもあはれむ  
 れのをもたせりし物にたなつともあはれむ  
 けりし物にたなつともあはれむ  
 このもちゆくはつし海をさしゆくはつし  
 儀物もあはれむ高松殿のうけりし物に  
 後りもあはれむ高松殿のうけりし物に  
 小らもあはれむ高松殿のうけりし物に  
 折けりし物にたなつともあはれむ  
 小れもあはれむ高松殿のうけりし物に  
 折けりし物にたなつともあはれむ  
 のあはれむ高松殿のうけりし物に

年より先お初<sup>一</sup>き由お流<sup>二</sup>しめ<sup>三</sup>かゝるるまで一<sup>四</sup>あめりな<sup>五</sup>あつた<sup>六</sup>
  
 ことを大康子<sup>七</sup>あつたのはしるべき<sup>八</sup>い<sup>九</sup>う<sup>十</sup>のおとよ<sup>十一</sup>清<sup>十二</sup>通<sup>十三</sup>を<sup>十四</sup>
  
 かくしてそのよしをい<sup>十五</sup>てい<sup>十六</sup>う<sup>十七</sup>う<sup>十八</sup>う<sup>十九</sup>う<sup>二十</sup>う<sup>二十一</sup>う<sup>二十二</sup>う<sup>二十三</sup>う<sup>二十四</sup>う<sup>二十五</sup>う<sup>二十六</sup>
  
 う<sup>二十七</sup>う<sup>二十八</sup>う<sup>二十九</sup>う<sup>三十</sup>う<sup>三十一</sup>う<sup>三十二</sup>う<sup>三十三</sup>う<sup>三十四</sup>う<sup>三十五</sup>う<sup>三十六</sup>う<sup>三十七</sup>う<sup>三十八</sup>
  
 う<sup>三十九</sup>う<sup>四十</sup>う<sup>四十一</sup>う<sup>四十二</sup>う<sup>四十三</sup>う<sup>四十四</sup>う<sup>四十五</sup>う<sup>四十六</sup>う<sup>四十七</sup>う<sup>四十八</sup>
  
 う<sup>四十九</sup>う<sup>五十</sup>う<sup>五十一</sup>う<sup>五十二</sup>う<sup>五十三</sup>う<sup>五十四</sup>う<sup>五十五</sup>う<sup>五十六</sup>う<sup>五十七</sup>う<sup>五十八</sup>
  
 う<sup>五十九</sup>う<sup>六十</sup>う<sup>六十一</sup>う<sup>六十二</sup>う<sup>六十三</sup>う<sup>六十四</sup>う<sup>六十五</sup>う<sup>六十六</sup>う<sup>六十七</sup>う<sup>六十八</sup>
  
 う<sup>六十九</sup>う<sup>七十</sup>う<sup>七十一</sup>う<sup>七十二</sup>う<sup>七十三</sup>う<sup>七十四</sup>う<sup>七十五</sup>う<sup>七十六</sup>う<sup>七十七</sup>う<sup>七十八</sup>
  
 う<sup>七十九</sup>う<sup>八十</sup>う<sup>八十一</sup>う<sup>八十二</sup>う<sup>八十三</sup>う<sup>八十四</sup>う<sup>八十五</sup>う<sup>八十六</sup>う<sup>八十七</sup>う<sup>八十八</sup>
  
 う<sup>八十九</sup>う<sup>九十</sup>う<sup>九十一</sup>う<sup>九十二</sup>う<sup>九十三</sup>う<sup>九十四</sup>う<sup>九十五</sup>う<sup>九十六</sup>う<sup>九十七</sup>う<sup>九十八</sup>
  
 う<sup>九十九</sup>う<sup>百</sup>う<sup>百一</sup>う<sup>百二</sup>う<sup>百三</sup>う<sup>百四</sup>う<sup>百五</sup>う<sup>百六</sup>う<sup>百七</sup>う<sup>百八</sup>
  
 う<sup>百九</sup>う<sup>百十</sup>う<sup>百十一</sup>う<sup>百十二</sup>う<sup>百十三</sup>う<sup>百十四</sup>う<sup>百十五</sup>う<sup>百十六</sup>う<sup>百十七</sup>う<sup>百十八</sup>
  
 う<sup>百九</sup>う<sup>百十</sup>う<sup>百十一</sup>う<sup>百十二</sup>う<sup>百十三</sup>う<sup>百十四</sup>う<sup>百十五</sup>う<sup>百十六</sup>う<sup>百十七</sup>う<sup>百十八</sup>

ほんごとをいせしむらむに清姫君をいさむわごしん<sup>一</sup>とせま<sup>二</sup>
  
 けさ<sup>三</sup>あつ<sup>四</sup>身<sup>五</sup>の<sup>六</sup>天<sup>七</sup>を<sup>八</sup>い<sup>九</sup>ふ<sup>十</sup>え<sup>十一</sup>て<sup>十二</sup>わ<sup>十三</sup>の<sup>十四</sup>あ<sup>十五</sup>り<sup>十六</sup>と<sup>十七</sup>い<sup>十八</sup>は<sup>十九</sup>え<sup>二十</sup>は<sup>二十一</sup>
  
 ふよける<sup>二十二</sup>も<sup>二十三</sup>田<sup>二十四</sup>宮<sup>二十五</sup>も<sup>二十六</sup>い<sup>二十七</sup>は<sup>二十八</sup>あ<sup>二十九</sup>り<sup>三十</sup>つ<sup>三十一</sup>て<sup>三十二</sup>い<sup>三十三</sup>は<sup>三十四</sup>は<sup>三十五</sup>
  
 ろ<sup>三十六</sup>を<sup>三十七</sup>い<sup>三十八</sup>は<sup>三十九</sup>る<sup>四十</sup>の<sup>四十一</sup>田<sup>四十二</sup>宮<sup>四十三</sup>も<sup>四十四</sup>い<sup>四十五</sup>は<sup>四十六</sup>あ<sup>四十七</sup>
  
 貞<sup>四十八</sup>后<sup>四十九</sup>高<sup>五十</sup>ら<sup>五十一</sup>は<sup>五十二</sup>い<sup>五十三</sup>は<sup>五十四</sup>わ<sup>五十五</sup>け<sup>五十六</sup>の<sup>五十七</sup>田<sup>五十八</sup>宮<sup>五十九</sup>も<sup>六十</sup>い<sup>六十一</sup>
  
 か<sup>六十二</sup>ら<sup>六十三</sup>の<sup>六十四</sup>や<sup>六十五</sup>ま<sup>六十六</sup>に<sup>六十七</sup>あ<sup>六十八</sup>り<sup>六十九</sup>福<sup>七十</sup>く<sup>七十一</sup>ま<sup>七十二</sup>ら<sup>七十三</sup>あ<sup>七十四</sup>
  
 す<sup>七十五</sup>て<sup>七十六</sup>田<sup>七十七</sup>宮<sup>七十八</sup>も<sup>七十九</sup>い<sup>八十</sup>は<sup>八十一</sup>わ<sup>八十二</sup>け<sup>八十三</sup>の<sup>八十四</sup>田<sup>八十五</sup>宮<sup>八十六</sup>も<sup>八十七</sup>い<sup>八十八</sup>
  
 け<sup>八十九</sup>ん<sup>九十</sup>う<sup>九十一</sup>は<sup>九十二</sup>い<sup>九十三</sup>の<sup>九十四</sup>君<sup>九十五</sup>ら<sup>九十六</sup>は<sup>九十七</sup>い<sup>九十八</sup>は<sup>九十九</sup>の<sup>百</sup>田<sup>百一</sup>
  
 と<sup>百二</sup>ま<sup>百三</sup>ら<sup>百四</sup>は<sup>百五</sup>い<sup>百六</sup>は<sup>百七</sup>い<sup>百八</sup>ま<sup>百九</sup>ら<sup>百十</sup>の<sup>百十一</sup>あ<sup>百十二</sup>
  
 か<sup>百十三</sup>の<sup>百十四</sup>い<sup>百十五</sup>は<sup>百十六</sup>も<sup>百十七</sup>い<sup>百十八</sup>は<sup>百十九</sup>わ<sup>百二十</sup>け<sup>百二十一</sup>の<sup>百二十二</sup>田<sup>百二十三</sup>
  
 あ<sup>百二十四</sup>り<sup>百二十五</sup>も<sup>百二十六</sup>い<sup>百二十七</sup>は<sup>百二十八</sup>わ<sup>百二十九</sup>け<sup>百三十</sup>の<sup>百三十一</sup>田<sup>百三十二</sup>
  
 は<sup>百三十三</sup>ま<sup>百三十四</sup>も<sup>百三十五</sup>い<sup>百三十六</sup>は<sup>百三十七</sup>い<sup>百三十八</sup>の<sup>百三十九</sup>田<sup>百四十</sup>
  
 せ<sup>百四十一</sup>ら<sup>百四十二</sup>は<sup>百四十三</sup>い<sup>百四十四</sup>は<sup>百四十五</sup>わ<sup>百四十六</sup>け<sup>百四十七</sup>の<sup>百四十八</sup>田<sup>百四十九</sup>
  
 せ<sup>百五十</sup>ら<sup>百五十一</sup>は<sup>百五十二</sup>い<sup>百五十三</sup>は<sup>百五十四</sup>わ<sup>百五十五</sup>け<sup>百五十六</sup>の<sup>百五十七</sup>田<sup>百五十八</sup>

















夜にゆくも夜の海にふきかきしつるまを霞を葉にうはく  
しく相残き日影さしきうらめしき光をけしき之を百千うらめ  
しき海にうらめしき影これらなる物よみえ枝もさうりけつて花も  
の都くとも花もさしき垣ひの平をくらみわたりけり花も秋の  
面せりうらめしきけしき日影の光も花もさしき春の光も  
花もさしきけしき光もさしき花もさしき秋の光もさしき  
りもさしきけしき光もさしき花もさしき秋の光もさしき  
の都くとも花もさしき垣ひの平をくらみわたりけり花も秋の  
面せりうらめしきけしき日影の光も花もさしき春の光も  
花もさしきけしき光もさしき花もさしき秋の光もさしき  
りもさしきけしき光もさしき花もさしき秋の光もさしき

あけぬ海にうらめしき影これらなる物よみえ枝もさうりけつて花も  
の都くとも花もさしき垣ひの平をくらみわたりけり花も秋の  
面せりうらめしきけしき日影の光も花もさしき春の光も  
花もさしきけしき光もさしき花もさしき秋の光もさしき  
りもさしきけしき光もさしき花もさしき秋の光もさしき  
の都くとも花もさしき垣ひの平をくらみわたりけり花も秋の  
面せりうらめしきけしき日影の光も花もさしき春の光も  
花もさしきけしき光もさしき花もさしき秋の光もさしき  
りもさしきけしき光もさしき花もさしき秋の光もさしき







玉法じり菊

西へ東宮七条の世の女長和也年とてつと少女をめれおと  
 けり學士小島大に匡衛の子れ一糸院の清と知の義人けり  
 乃のり一擊周をそりて世の富その比大とあはせ大后少ておちり  
 ます堀河のそと太右衛門とて内大后とていゆとの君ら大か  
 之のくおちりては二部ハせ侍侍にきいお一れへりる松  
 也のを二位中納言とていゆ一よのそらへ相とおぼせとてき  
 けり大のうはくく子りくゆにせ侍侍とのり月うらむか  
 病をものせきせぬけ七月ふけりてせめりてわくは案案あか  
 けり多しそそあ人のれ之氣ふ家りるのそとあそりてせぬい  
 けりくくえ月十日にいとあつふりやう宮のうききとてあ君  
 出れぬり大のうらもさよりそよあといはれりてこけりけり  
 ませたまふに吹之てせめふ大納言殿尾うらむとのけりきとてい

後朱雀院  
后生子

玉法じり菊  
 西へ東宮七条の世の女長和也年とてつと少女をめれおと  
 けり學士小島大に匡衛の子れ一糸院の清と知の義人けり  
 乃のり一擊周をそりて世の富その比大とあはせ大后少ておちり  
 ます堀河のそと太右衛門とて内大后とていゆとの君ら大か  
 之のくおちりては二部ハせ侍侍にきいお一れへりる松  
 也のを二位中納言とていゆ一よのそらへ相とおぼせとてき  
 けり大のうはくく子りくゆにせ侍侍とのり月うらむか  
 病をものせきせぬけ七月ふけりてせめりてわくは案案あか  
 けり多しそそあ人のれ之氣ふ家りるのそとあそりてせぬい  
 けりくくえ月十日にいとあつふりやう宮のうききとてあ君  
 出れぬり大のうらもさよりそよあといはれりてこけりけり  
 ませたまふに吹之てせめふ大納言殿尾うらむとのけりきとてい



續後撰

遜後倫子

事考くきこえせぬり

同

批

ことなきをのりきりて申す

此をきこえしをぬけま月日

の布さ方に

四月ふたつ

女房くらみ

大武の

いふまじ

































多岐の如く美に定てう天<sup>公</sup>網<sup>仁</sup>さよの河のしひまえのふ  
るある世中を転るや三糸流のゆきをくまはれは  
あし<sup>倫</sup>くた<sup>倫</sup>るは<sup>倫</sup>の<sup>倫</sup>も<sup>倫</sup>う<sup>倫</sup>う<sup>倫</sup>う<sup>倫</sup>

あはせとあは

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*



